

立建造新本堂 二) 開創の天祐

伊藤 丈

本堂は初め、常念仏堂また御影堂と称されたが、その造立許可が寺社奉公から下りたのは、享保三年（一七一八）十一月五日のことである。

翌四年二月十七日、開山祐天上人の真像、舍利、舌根が麻布龍土町の禅室から善久院祐天寺の仮本堂へ、祐海を侍者として晋山安置されるが、新たに建てられる六間に七間の本堂は、この年の同月二十二日に、祐海がみずから阿弥陀経と念仏回向を修して地鎮祭を執り行ない、三月五日、大工甚兵衛を棟梁として鉦初の規式を済ませた。

六日、地形取りに掛かる。まず黒土を取り去り、赤土と砂利を等分に混ぜて地面に播き、それを突き固めて五月十三日に、この地形ができあがった。施工に要した人足は、およそ千五百人に上る。村方町方から幟を立てて参詣したひとりびとりに、その土を踏ませたからである。

五月十九日、本堂の柱石を据える。柱石は、開山祐天上人が生前に名号認めた石を用い、その柱石の下に、祐海が名号

を記した玉石を敷き詰め、その上に赤土を重ねて突き固めた。さらに、本堂建立の訳書ならびに法縁好身の真俗名を祐海が委細に書き列ねた石を、土台の石垣に組み込んだ。

その上、本堂内陣下の地形土には、祐天上人が寂年まで入住した龍土町の禅室居間下の土を布き、同二十一日、本堂の木材を深川から品川まで船に積み、品川から当寺へ、牛車で運び入れたのである。二十七日頃、本堂の柱立が整い、六月三日晴天吉辰につき、午の上刻に上棟式が、祐海と棟梁甚兵衛ほか大工十数人により挙行され、この式での備え餅が、大奥の一位天英院、月光院、法心院、蓮浄院、松姫、竹姫そのほか年寄衆へ贈られた。天井の内側には、祐海の筆になる長さ五尺三寸、幅一尺二寸、厚さ一寸八分の棟札が納められた。

祐海は、本堂の柱の数を三十八本と定めた。祐海記『明顕山祐天寺永代式條』に「柱の数、各々表相あるが故に、建立の堂宇自ら方規に合う。故に此れ般の事

は、一一吉祥たるをや。就中、柱に表相ありと謂うは、内陣の柱十二本は十二光仏を表わし、下陣の柱二十四本は第十八願と六字の名号とを表わし、向拝の柱二本は観音勢至に表わす。都合三十八本なり。然るに開山大僧正は、縁山の貫主三十六代、某し即ち当時二世にして、また是れ三十八の数なり。抑もまた、某し春秋三十八の時をもって此の道場を建つ。皆な是れ自然の符号なり」とあることから、その由縁が知られる。

七月十五日、本堂は慶成した。午の中刻に入仏供養として、祐天上人の尊影を新本堂中央の須弥壇に、さらに舌根をその影像の前に安置した。ひきつづき祐海を導師に、義潭、善達、壇的、了祐、秀善、官隆、天歴、香残、雅山、祐益、祐達、靈中、察岸、祐門、祐弁、弁瑞、覚順、祐意、了応、真海、春岡、随音、祐円、海応、祐存など五十一僧により、四智讚、四奉請、四誓偈、日中礼讚、阿弥陀経が厳かに奉修され、十六日より二十五日までの十日間、千部読経が興行

祐天寺の開創 (二) 本堂新建造立

伊藤 丈

された。

二十六日早暁、曙光に映えて、紫雲が
本堂に淡くたなびいたという。